

図書名	受験番号	氏名
20人の建築家がつくる最高の住宅		

私は今まで建築家という仕事は、依頼主の要望を聞き設計を建てるそんな漠然としたイメージしかありませんでした、この本を読んで初めて建築家の本当の仕事というものに触れられたような気がします。家のコンセプトが全く一緒だというのは無く、同じ家の中の部屋ひとつをとってもまったく違うつくりになっている。それはそこに住む人の個性があるからなのだろうか。

私は高野保光さんの設計された“家族が穏やかに過ごせる空間と子供の感性を刺激する空間が同居した家”にとっても惹かれました。この家は設計途中に長男が産まれたご夫婦の‘子供達にすくすくと育って行って欲しい’という思いと、高野さんの‘安全性を確保したうえで、家の中で段差を楽しめる空間が必要だ’という思いが詰まった家です。長い敷地をいかして子供室棟と家族室棟の二つにわけ、挟むように中庭があるという空間を広く使ったつくりになっています。家族室棟のつくりはご夫婦たっの要望で和室を取り入れてあり、子供室棟はデコボコ階段や大きな本棚など子供の興味を惹き出すような楽しげなつくりで、そこで過ごすだろう夫婦の時間、家族の時間をなぜだか少しだけ垣間見たかのような気持ちになりました。写真や少しの説明書きを見ただけで、こんな気持ちになれたのはそこに詰まった思いがいろんなものを超えて伝わってきたからだろう。そして一緒なものがないのは、建築家の依頼主に対する一つ一つの思いも違っているからなのだと分かった。依頼主の要望や趣味趣向を聞き、家族構成や性格からその人の暮らし方を想像し考え、その人自身も気付かなかった要望を引き出し、より住みやすい空間を提供する事が建築家の仕事なのだと思った。家をつくるという事は、建築家と依頼主との二人三脚で出来上がっていくもので、両者の思いが上手く交わって信頼関係が出来たそのもとで出来る家はそこに住む人達にとって毎日の生活をワクワクとさせるような唯一無二の‘世界にたった一つの家’になるのだと思いました。私も普段の生活の中から信頼関係を築くための第一歩となる、コミュニケーションを大切にしていこうと思った。